

科研費100周年記念シンポジウム

科学研究費助成事業（科研費）は、平成30年度にその前身となる大正7年（1918年）創設の「科学奨励金」以来、100周年を迎えました。これを記念して、平成30年11月5日（月）13:00～17:30に東京大学本郷キャンパス安田講堂にて、研究者182人をはじめとした合計529人の参加を得て「科研費100周年記念シンポジウム」を開催しました。

参加者には、科研費制度発展の歩みを総括した『科研費100周年記念誌』等を配布しました。

当日のプログラムの概要は以下のとおりです。

○会場入り口の案内



○会場の様子①



○受付の様子



○会場の様子②



○ 文部科学大臣政務官挨拶



開会に当たり、白須賀貴樹^{しらす きたかき}文部科学大臣政務官より、本シンポジウムの目的である「科研費制度創設100周年を機に、これまでの科研費制度の歩みを振り返り、現行制度の意義や課題を再認識するとともに、科研費改革の現状や展望を示し、さらには日本の学術研究の振興に関する理解を深めていただく」ことや「今後も、科研費制度を基礎から応用までのあらゆる独創的・先駆的な研究を助成する制度として、広く国民の理解を得るための努力を重ね、研究現場の声に耳を傾けながら、不断の改善・充実に努めて」いくことなどの、挨拶がありました。

○ 日本学術振興会理事長挨拶



続いて、^{さとみすすむ}里見進 日本学術振興会理事長より、学術研究の意義やそれを取り巻く現状、科研費の重要性、科研費の改善と改革の歴史に触れた挨拶がありました。また日本学術振興会においては今後も、科研費の他、研究者の養成、国際交流の促進、大学改革や大学のグローバル化の支援などを行ってゆくことを述べられました。

○ 学術研究助成課長講演



^{かじやまさし}梶山正司 文部科学省研究振興局学術研究助成課長より、「科研費の現況」について講演がありました。

科研費の概要、科研費改革の進捗、平成 31 年度概算要求について、科研費制度の変遷にも触れたうえで、現在の科研費の状況を解説しました。

○ 日本学術振興会理事基調講演



^{いやすひろ}家泰弘 日本学術振興会理事より、「科研費 100 年とこれから」をテーマに基調講演がありました。

「科研費は研究者の自由な発想に基づく研究プロポーザルを、メリットベースのピア・レビューによって審査・採択する競争的研究資金制度という位置付けでありまして、科研費システムは我々の先人が非常に苦勞して作り上げて、不断の改善をしてきた非常に大事な資産です。」と話されました。さらに「研究者全員が時として応募する側の立場、時として審査・評価する側の立場で、それぞれ適切に行動して大切に守り育てていくべきものと本当に思う次第であります。」と話をされ、講演を締めくくりました。

○ 休 憩



20 分の休憩時間中に 4 階ロビーにおいて、参加者の方々は、思い思いの飲み物を手に、暫しの時間歓談を楽しみました。

○ 梶田隆章先生記念講演



かじた たかあき
梶田隆章 東京大学卓越教授・特別荣誉教授・東京大学宇宙線研究所長より、「基礎科学研究を支える科研費—神岡での経験から—」をテーマに記念講演がありました。

初めに神岡での研究を支えた科研費について話がありました。「1980年代初めに開始されたカミオカンデ実験の光電子増倍管の開発に科研費の一般研究Aが非常に重要な役割を果たしました。」更に、「カミオカンデの運転、それからカミオカンデのデータを使った研究は、ほぼ全ての期間にわたって科研費でその大半を賄われてきました。その間に1987年には超新星ニュートリノの観測、これはもちろん小柴先生のノーベル賞の受賞に繋がるものですし、88年には大気ニュートリノ欠損の発見、それから89年には太陽ニュートリノ欠損の確認、これも将来のニュートリノ振動の発見に繋がる非常に重要な成果を出しました。」「スーパーカミオカンデ自体は国から直接サポートを受けて、運転をしておりますけれども、個々の研究ではやはり科研費が重要だと思います。この頃途切れることなくサポートをいただいたということに、非常に私としては感謝しております。」

続いて、日本の研究の現状と科研費について話があり、最後に、「日本の国には科学と技術で世界から尊敬され続ける国であってほしいと思っています。そのためには、あらゆる研究者が研究できる国である必要があるのではないのでしょうか。そして、自由な発想に基づく研究ができる科研費こそが、研究人材の力を発揮させる制度だと思っています。」とまとめられました。

○ 大隅良典先生記念講演




おおすみ よしのり
大隅良典 東京工業大学荣誉教授・大隅基礎科学創成財団理事
長より、「半世紀の研究を振り返って—研究を支えてくれたもの—」をテーマに記念講演がありました。

半世紀の研究生活を振り返りながら、「私の研究は、ここ40年間ぐらいまさしくほぼ全て科研費で支えられてきたということになります。」「研究の初期には必ずしも多額の研究費は要りませんが、自由な発想をする環境と自由に考える時間が大変大事だと思っています。」「オートファジーのフィールドは大変速く立ち上がりましたが、それでもオートファジー遺伝子が分かってから今のようなフィールドになるのに、10年、20年という歳月が必要だったということも大事なことであります。」と話されました。

最後に、「私たち科学者は科学的な物の見方、考え方が広がる事を常に意識していないといけないわけですが、科学を文化として楽しんで、国だけではなくて社会全体が科学を支えるという意識がもう少し定着することが大事なのではないかと思っています。基礎研究の大事さを声高に言わないといけない状況や若者が「すぐ役に立つ」ということを追いかけないといけない状況をなんとか打破したいですし、また研究者の多様性を大事にすることを是非とも考えていかないといけないと思っています。」とまとめられました。

○ 本庶佑先生お祝いのメッセージ

本庶 佑 特別教授 (京都大学 高等研究院 副院長・特別教授)



本庶 佑 (ほんじょ たすく) (76歳)
 京都大学 高等研究院 副院長・特別教授
 公益財団法人神戸医療産業都市推進機構理事長

【略歴】
 昭和41年(1966)3月 京都大学 医学部 卒業
 50年(1975)1月 京都大学大学院医学研究科 生理系 博士課程 修了(医学博士)
 46年(1971)9月 カネギ研究所 発生学部門 招へい研究員
 48年(1973)7月 米国 国立衛生研究所 客員研究員
 49年(1974)11月 東京大学 医学部 助手
 54年(1979)12月 大阪大学 医学部 教授
 59年(1984)3月 京都大学 医学部 教授
 平成 7年(1995)4月 同 大学院医学研究科 教授
 8年(1996)10月 同 大学院医学研究科長・医学部長 (H12.9まで)
 11年(1999)4月 高等教育局 科学官 併任(H14.3まで)
 13年(2001)1月 文部科学省 科学官(高等教育局 科学官) 併任(H16.9まで)
 17年(2005)4月 京都大学 大学院医学研究科 特任教授
 平成17年 文部科学省 科学官(高等教育局 科学官) 併任
 平成18年 文部科学省 科学官(高等教育局 科学官) 併任
 平成19年 文部科学省 科学官(高等教育局 科学官) 併任
 平成20年 文部科学省 科学官(高等教育局 科学官) 併任
 平成21年 文部科学省 科学官(高等教育局 科学官) 併任
 平成22年 文部科学省 科学官(高等教育局 科学官) 併任
 平成23年 文部科学省 科学官(高等教育局 科学官) 併任
 平成24年 文部科学省 科学官(高等教育局 科学官) 併任
 平成25年 文部科学省 科学官(高等教育局 科学官) 併任
 平成26年 文部科学省 科学官(高等教育局 科学官) 併任
 平成27年 文部科学省 科学官(高等教育局 科学官) 併任
 平成28年 文部科学省 科学官(高等教育局 科学官) 併任
 平成29年 文部科学省 科学官(高等教育局 科学官) 併任
 平成30年 文部科学省 科学官(高等教育局 科学官) 併任
 平成31年 文部科学省 科学官(高等教育局 科学官) 併任

先日ノーベル生理学・医学賞の受賞が決定された
 ほんじょたすく
 本庶 佑 京都大学高等研究院副院長特別教授・公益財
 団法人神戸医療産業都市推進機構理事長より、科研
 費 100 周年記念へのお祝いのメッセージを頂きました
 ので、この間の時間を利用して紹介しました。

「私のすべての研究成果は科研費なくしては全く
 存在しなかった、といっても過言ではありません。」
 「科研費の長い歴史の中で、科研費の使い勝手は大
 幅に改善され、予算額も拡大されてきました。」

「関係者の皆様方におかれましては、引き続き科研
 費制度の改革に努めていただき、科研費の理想像を追求していただきたいと切に願っておりま
 す。」

○ パネルディスカッション

続いて、「日本の学術、科研費の歴史を振り返る」をテーマに、
 かいちえんこ
 甲斐知恵子 東京大学医科学研究所
 教授をコーディネーターとするパネルディスカッションが行われました。

○ 全体の様子



○ コーディネーターとパネリスト

パネルディスカッション
 日本の学術、科研費の歴史を振り返る



甲斐 知恵子 東京大学 医科学研究所 教授	村松 岐夫 京都大学 名誉教授	藤嶋 昭 東京理科大学 名誉教授・ 光触媒国際研究 センター長	中西 重忠 (公財)サントリー 生命科学財団 生物有機科学 研究所長	宮脇 和男 金沢工業大学 産学連携室 教授
---------------------------------------	------------------------------	--	---	---------------------------------------

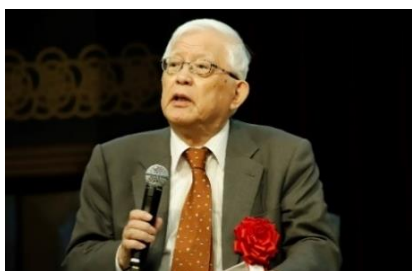
初めに4名のパネリストから順に自己紹介と科研費についての考えなどを述べられました。
 むらまつみちお
 村松岐夫 京都大学名誉教授、
 ふじしまあきら
 藤嶋 昭 東京理科大学名誉教授光触媒国際研究センター長、
 なかにししげただ
 中西重忠 公益財団法人サ
 ントリー生命科学財団生物有機科学研究所長の3名の研究者からは、ご自身と科研費との関わりについ
 て述べられました。
 みやまかずお
 宮脇和男 金沢工業大学産学連携室教授からは、ご自身が事務担当として科研費を下支
 えしてきたご経験を述べられました。その後甲斐先生の進行により基礎研究の重要性や、将来を見据えた
 学術支援のあり方について、ディスカッションが行われ、最後に全体討論をまとめました。

パネルディスカッションの主な内容は次のとおりです。

- ・ 科研費はこれまでも審査の改善、研究種目の柔軟な見直し、交付内定の早期化、基金化の推進な
 ど、多くの改善を行い、我が国独自の発展を遂げ、学術の進展に多くの貢献があったことなど、科
 研費が我が国の学術研究を支えてきた

- ・しかし現在、基盤的経費（運営費交付金）と科研費とのデュアルサポートシステムが機能不全に陥り、多くの研究者が苦しんでいる
- ・学術の振興は、我が国の将来的な発展のために欠かすことができない未来への投資である
- ・研究者を初めとする学術コミュニティ全体が社会・国民からの負託を得て、水準の高い高度な知的活動を行うことが求められており、そのことを研究者自身も十分に自覚して、行動することが必要である
- ・同時に、国に対しては、世界規模での競争が激化する今だからこそ、国としての明確なビジョンを日本国民、国際社会に表明して、学術振興施策のさらなる強化が図られるということを期待したい

○村松岐夫先生



○宮寫和男先生



○藤嶋昭先生



○甲斐知恵子先生



○中西重忠先生



(了)